期待に胸ふくらませ中大の門を叩いた自分。そして、きょうの自分を比べてみよう。たった1500日間の大学生活だったが中身は濃かった。社会への旅立ちの準備もすっかり整った6人の「それぞれの挑戦」をお届けしよう。

行動の範囲を取り払い自由に生きる

法学部政治学科
内山　拓君

どこからみても〝マスコミ人〟といった、エネルギッシュな感じだった。なぜって、気さくで優しそうな彼が一転、話の本質になると、芯の強そうなところをチラっとのぞかせるからである。

彼が卒業までに5年間を要したのも、それを理解するのに十分な理由があった。中学生の時、自分の家がホストファミリーとして受け入れたインドの留学生に出会ったのがきっかけだった。その留学生は、カーストの最下層から国費留学生までになった学生で、彼からよくインドの貧困の実情を聞かされた。

自分の身近な狭いコミュニティーに生きている内山君にとって、「同じ地球に生まれて、どうしてこういう差があるのか不思議に感じた」という。政治や社会に対する確かな目を養いたかったので、中大の法学部政治学科に入った。自分の行動の範囲を取っ払って、なにごとも自由に生きたかったからだ。

大学入学後は原発問題、旅行、留学、青年海外協力隊、サークル活動や居住地である川口市のNGO活動など、手当たり次第に動き回った。そして2年生で、西アフリカにスタディーツアーに行き2週間、現地の人と寝食を共にした。この時に貧困問題と真っ向から向き合い、「開発の仕事に携わって、もっと現地の人と溶け込みたい」と感じた。

チャンスは訪れた。行き先はスリランカである。「この機会を逃がしたくない」という一方で、「大事な4年生の春」でもある。心は揺れたが、結局「一旦は退学しても、その後に復学する制度」を選んだ。

スリランカは内戦下にあった。コロンボ大学の聴講生として学生ビザを得た内山さんは、NGOのアシスタント・スタッフとして、現地に入った。スリランカにも戦争孤児は多い。父親が戦死すると、再婚が一般的に許されていないため、母親は出稼ぎに出なければならない。そこで内山さんは、残された子供たちのメンタル・ケアに取り組んだ。

1箇所に固まったコミュニティーの中での生活を強いられる子供たちのために、内山さんは運動会を企画した。日本人を見ようと、会場は現地の人であふれた。とはいっても普段は集会があっても、まず集まらない。そういう意味では、人が集まっただけでも意義があった。

卒業後はテレビのディレクターとして活躍する。スリランカは彼に大きな教訓を与えてくれた。それは「どこの国の人も同じ人間である」ということだ。彼は「いままで、なにか非日常的なところでは、特別なことが起きているのではないかと勝手に思っていた自分を恥ずかしく思う。」と心から思った。

しかし、海外でみた貧困の苦しみを肌で感じ、「何とかしたい」と思っても、日本に戻れば自分は高い生活水準で暮らす。ジレンマを感じながらも、それが現実である。

「どの国に生まれたかなどは、ラッキー、アンラッキーの問題ではなく、その差は是正していけるものなのです。ただ、ギャップが余りに大きいので、その実態をまず知ってほしい。私は、その橋渡し的役目をやってみたいのです。

そこで内山さんに仕事に関する夢を聞いてみた。「それは、貧困というものを目にして可愛そうだな、何とかしたいと思う自分がいる一方で、日本に帰ってくれば自堕落で楽な方へ流れていきそうな自分がいる。このギャップを克服するために、現実をとらえ続けていきたい。そして視聴者には、同じ人間のなかで、その違和感が併存していることに疑問を感じてほしいということです。将来的には、そう考えてくれるような番組を作りたいですね」と、一気に話してくれた。

なにか、後輩に一言と注文したら、彼は何度も何度も繰り返した。「中大だから……とか、○○だから……とか、と枠をはめないで欲しい。枠をはめないで、何かに集中してやり遂げて欲しい。居心地のいい人間関係に満足せず、いろいろな友だちを作って欲しい」。

＝◇＝

確かに大学生ほど、可能性にあふれた時代はない。幸い大学にはいろいろな人間がいる。自分と違う生き方、考え方を持つ人と話をする機会が最も多い場所ではないだろうか。

彼にとっての中大は、彼に対して大きなフィールドを与え、視野を広げさせてくれた。出会いがあり、ネットワークの大切さを感じさせてくれた。「なにかしたい。なにかやりたい」を絶えず持っていた内山さんには、中大は最高の大学であったようだ。私は「知識だけでなく、〝心の勉強〟をこの5年間で十分やってきた人だ」と思った。

（学生記者・佐多　愛子）

２度と同じ弓は引けない教えを守る

経済学部経済学科

大塚　茂雅君

「大塚茂雅」という人物をつくったベースには常に弓道があった。弓道は高校時代からずっと続けている。大学に入ってからは完全に生活の一部になっていった。週2～3回のペースで道場に通い、その間に母校の高校のコーチもしていた。もちろん、すべてがうまく運ぶわけはない。自分の悪いところがわかっても、ここが悪いと理屈でわかっていても、思うように体が動かない。

そんな時、大塚さんが実践してきた考え方がある。それは「とりあえず自分では、どこまで出来るかを考える。ここまでだったら出来る、とわかると、どこが出来ていないか、課題がハッキリしてくるわけです。自分の目指しているものとのギャップがつかめたら、後は後輩のコーチを受けたり、文章で言われていることを研究したりしています」。

〝慣れ半分、理屈半分〟だという。あいまいな勘や慣れといった、あいまいなものに頼っていると、ある程度までは上達するけれど、その後が続かない。「いつも自分の身体で再現して証明してみせたいっていう欲があって、そういうところには理屈も必要かなって思います」。きちんと自分のスタイルが説明できる、強い人だなと思った。昨秋、五段に昇段した。

弓道の審査は、的に当たったから合格というわけではなく、ある種の気合や形など、さまざまな項目があるらしい。「一射絶命。つまり、一回一回、命をかけて大切に弓を引け、という言葉があるように、同じことをしているつもりでも、2度と同じ弓は引けない」。大塚さんの話を聞いていると、弓道というのは己との勝負だとつくづく思う。

「引いていて心地よい弓っていう

のも、少ないけれどあります。それは自分の心の高まりや、ある種の緊張感、引いたあとの充実感。当たっての余韻も含めて、初めて感ずる快感というのはあります。好きな言葉に〝照顧脚下〟という言葉があります。『足元を照らして顧みよ』という意味ですが、その通りだと思います。気が乗らないときでも、弓一つでも引いてみるとか、少しでも『きょうは、これをやったぞ』っていう跡を残すという……」。

こういう堅実な考えだから、大学生活全体も悔いはない。「大学に入る前のイメージ以上に実際は充実していました。自己採点をすれば100点。いや120点でもいいくらい」といった。弓道を通して得た自信が4年間のすべてを形作った。

それを就職面で見てみよう。就職面接で弓道のことばかりを話していたら「弓をやっていて、ビジネスに生かせることはあるのか」と質問された。大塚さんは弓道にとって大切な〝呼吸〟のことを即座に答えた。

「息を大きく吸って、スーッと腹の底に落としていって、グッと締める。つまり、息を落とすと力が出るし落ち着きます。緊張して頭が真っ白になった時でも、息を落とすと、見えていなかったものが見えてくるので、大きなビジネスでも力が出せます」と説明した。

大塚さんはJR東日本に就職する。小学生のころ電車通学していた頃から、2本の線路が確実に人やものを運んでいく力強さにひかれていった。なにか、小さな頃の鉄道に寄せる思いと、高校以後の弓で鍛えた人生観が一脈通じてはいないだろうか。

大学2年以降は、交通経済学ゼミに属していた。3年の時は、グループで多摩都市モノレールの各駅ごとの利用状況などを調べ、論文集をまとめた。卒論では鉄道会社の経営の多角化戦略について書いた。趣味を学問の領域にまで高められたことは嬉しかった。

趣味も一貫している。鉄道写真である。秋の学内美術コンクールで優秀賞、学長賞と2年連続で授賞した。優秀賞を獲ったときの作品は、多摩動物公園駅の付近を歩いていたとき、逆光に照らされた線路や青々とした草むらに生命感をみて、コンパクトカメラのシャッターを切ったものだった。学長賞を獲った作品は、八高線の駅で電車を待っていた時だった。そこにいた車掌さんを撮影したものだ。いずれも被写体として、日常的な何気ない風景に心ひかれるそうだ。いずれも被写体としては、ごくありふれたもので、どこか心休まるものを感じさせる。

大塚さんの話は、一つのものへの興味が次から次へと大きく広がり、やがて新幹線のような長く、力強く、たくましい編成を作るのだった。

（学生記者　杉村麻衣子　竹平道郎）

地方の演奏旅行で知ったOBの恩情

商学部商業・貿易学科
田中　之雄君

眼鏡の奥から人懐っこい小さな目が笑いかける。商学部（商業・貿易学科）の田中之雄さん。実は10の団体からなる音楽研究会の委員長で、しかも、数ある全国の吹奏楽部のなかでトップを快走する名門の部に属し、自身も部員としてホルンを演奏する。その笑顔は彼の肩書をいっさい感じさせない。

あえて「大学生活を通して、一番の思い出」と聞いてみたら、その眼鏡の奥が一瞬引き締まり、「やっぱり部活です」ときっぱりいった。彼は中学、高校と吹奏楽部でチューバをやっていたので、大学以前から吹奏楽部に入ろうと心に決めていた。大学でホルンを選んだ理由は「大学へ入ったら、どのみち基礎からやり直さなければならない。スタートラ

インという意味では、楽器が違っても同じだ」と思ったからだ。

そこで、彼の中大における吹奏楽人生を振り返ってもらった。さすがに中大の練習はきつい。11時の閉門になるのも珍しくなかった。何がそこまで彼を駆り立てたのか。「いろいろな人との出会いの中で、相手の価値観と自分の価値観を突き合わせるのです。すると、また、自分が変わっていくのが実感できるのです」。単に音楽が好きというだけではない、それ以上のものが伝わってきた。

音楽研究会の委員長をやっていて、音楽研究会を支える学内外の多くの〝力持ち〟がいることを知った。九州に演奏旅行に行ったとき、何10年も前に卒業した先輩たちが手伝ってくださった。学員会を中心とする同窓生の温かい輪に包まれて、自分たちが活動しているんだなぁ、ということを初めて実感したという。

部の目標は「一人一人が音楽家になる」ことだそうだ。すると、田中さんにとっての「音楽家は?」「自分とお客さんの気持ちが、どれだけ通じ合えるかというところまで演奏できる人」との答だった。演奏技術より気持ちを大切にする田中さんらしい解釈といえる。

「小学校や中学校でも演奏しました。子供たちと接していて、自分たちが楽器を始めた頃の初心を思い出すんです。僕たちは全体のバランスを考えたとき、もっと考えたところで吹かなきゃいけない。でも、中学生は本当に楽器を吹ける喜びだけで、本心で吹いているんです。そういう純粋な気持ちを忘れちゃいけないと思うんです」

そんな豊かな音楽観を持つ彼にとって、「モーニング娘」など最近の流行曲の反応は……。そうしたら「全部、音楽ですよ。テレビから流れてくる曲は手広く聴きます」。意外に柔軟だった。しかし、話を未来に移すと「いまの自分には、4年前とは違う世界がある。将来を展望すると正直、多少の不安はありますが、楽しみの部分の方が大きいです。だって過去は思い出すのも楽しいし、イヤなことでも楽しいものになっちゃう」と、笑顔の裏側に、ある強さをのぞかせた。

10年後の自分。「中央大学を世の中にすごい存在感のある大学にしていきたい。中大は真面目で堅実だけど、もっと目立っていい。すごくいい大学だから」。中央大学の職員に内定している彼の言葉だ。

「中大の4年間を物に例えると……」と聞くと、「一眼レフカメラ」という答が返ってきた。カメラはレンズの操作一つで、遠くのものを近くに写せるし、近くのものを遠くに写すこともできる。それと同じで、4年間、さまざまな物をいろいろなカメラで、いろいろなレンズで、接することができたという。充実の4年間を過した人にしかいえない言葉に感じた。

（学生記者　友松　鹿毛　千穂　実）

やる気ある集団で頑張り精神を磨く

理工学部土木工学科
小池　安曇（あづみ）さん

小池さんが所属している土木工学科は、〝やる気〟のある集団だそうだ。「Civil Engineer」を掲げ、道路・上下水道など、市民生活の基盤となる部分を支える人間になることを目標とし、学生は講義を聞くため競い合って教室の前の方に座るという。

小池さんは埼玉県の秩父にある家から毎朝6時台の電車で、後楽園の理工校舎まで通った。

4年生になると、理工学部ではゼミではなく、個々に応じた研究室に入室する。小池さんは地理や地学に興味があり、地震工学や地形工学、水理学などに対する向学心から、「都

市の緑地が環境にどのような影響を与えるのか」というテーマを勉強するために研究室に入室した。

月曜日から土曜日まで毎日、朝から夜の0時まで研究室で勉強する必要があった。小池さんは終電の関係で、あまり夜は遅くまで残れない。その分、朝早く学校に出て来て埋め合わせをした。もともと女子の割合が少ない理工学部。小池さんの研究室も、女子は小池さんを含めて2人という状態だった。

研究の中身で一番厳しかったのは8月に1日3回、データ取りのため小石川後楽園での観測を続けなければならないことだった。気温、湿度、二酸化炭素の濃度、風速・放射収支（地面とその上の空気の熱の出入り、地熱量など）を調べるということである。

「観測のため、日曜日も学校に通いました。定期券も最大限、フル活用しました」と笑って話すが、文系の私たちには、こんな夏休みは耐えられないと思った。あと、小池さんにとって忘れられないのは、夏休みの群馬大での観測だった。1日中、飛行船を打ち上げ、夜中は1人でそれを見張っていなければならない。仲間のテントははるか向こうにある。その心細さといったら、言葉では言い尽くせないものだった。

このような多忙な4年間を送った小池さんを支えていたものは何だったのだろう。やはり、家族の支えが大きな部分を占めていた。「普段は意識しなくても、後で振り返ってみると、家族に感謝しければならない点が、山ほどありました」。

ところで小池さん、なぜ理工学部なのか。「文系は本を読めば学ぶことが可能なものがありますが、理系はそうはいきません。実験や実習など、学校でないと学べないことがたくさんあります。そこが好きなんです。そして、皆で学ぶ3年生までの教室の雰囲気も好きでしたね」といった。よほど、理系向きに出来ているのかもしれない。

勉強は一番初めが大変だが、やっているうちに好きになるケースが多い。案の定、小池さんは「希望の公務員試験にも受かったのだと思います」と目を輝かせていった。「大学で、一つのことに打ち込める自分に成長したと思います」。小池さんの就職先は埼玉県職員だ。具体的な仕事はまだ決まっていないが、どこで何をやらされても自信はある。

そこで小池さんに、後輩に託すメッセージを聞いてみた。「中央大学は中身のしっかりした、芯の強い学生が多いと思います。自分を成長させることができる〝場〟である環境を生かして、それぞれの中でやろうと思ったことを、最後までやり遂げてほしい。」とのことだった。

頑張り屋の先輩・小池さん。取材の私たちも熱い思いに応えるべく、自分の大学生活を振り返ってみるのに良い機会と思った。

（学生記者　土井敬士　林雅子）

縁の下の力持ち役 就職面でも生かす

文学部史学科

金澤　さつきさん

相模湖から中大まで32キロ。完歩者が重い体を引きずってキャンパスに入って来る。99年のウォーキングラリー（以下、WR）の完歩者がゴールした5月30日のことを、実行委員会副委員長の金澤さんは、全身が達成感に包まれていたことをはっきり覚えている。WRとの出会いは、まったくの偶然だった。大学に入った97年、金澤さんの目に飛び込んできたのが、「WRラリー参加者募集」の出店だった。いつしかスタッフと親しくなり、そのままスタッフになってしまった。

以後、3年間のWR活動が始まった。軽い気持ちで参加したが、いろ

いろ苦労もあった。その一つがスタッフ不足。WRは学外からの参加者も募る大規模な行事であるため、少なくとも45人以上のスタッフが必要になる。また、コースの下見も大変だった。年に32キロのコースを20回近くも歩く。この経験からコースの交通事情を把握し、チェックポイントに立つ人の配置を決めたりするのも大事な仕事だ。

99年WRで金澤さんの代が実行委員会の幹部となった。完歩後に行われるアトラクションは、今までは外部に協力を求めていたが、金澤さんは応援団やチアリーダーなど、学内の団体と交渉した。参加者に年配の方が多いことから和太鼓や吹奏楽も入れてみた。コースの途中にはクイズやビンゴゲームも用意した。

道中のチェックポイントで、参加者に笑顔で「もう少しですよ」と声をかける実行委員の人たち。この人たちのひと声が、どんなに参加者を勇気づけたことか。こうして1年かけて考えた結果が「完歩率95・6%」という数字をもたらしたのである。

しかし、その成果はたったの1日で消えてしまうが、金澤さんはへこたれない。逆に参加者の「ご苦労さま」という声に励まされ、それまでの疲れをいっぺんに吹き飛ばす。「とにかく参加者には楽しんでほしい」に徹した。

そして、この時期、茶道を始めることにした。お茶の世界を学ぶことで、人や周囲への気配り、もてなしの心に触れることが出来た。

こうして参加者を主役に、自分は裏方に回ったという経験から〝縁の下の力持ち〟という存在に目が向くようになっていった。自分の進路を決める時にも、この体験が次第に影響しはじめた。

金澤さんは、昔からおなじみの弁当箱の醤油ケースや紙ナプキンなどを作る会社を将来の道として選んだ。これらの商品には消費者がより使いやすく、しかも安心して使えるように、隠れた工夫が施されている。

仮に、ウナギのタレの入れ物の話にしても、ウナギを焼いた時に出る油、その油をタレに混ぜるとか、どこの醤油を使うとか……。

WR活動と茶道から得たものは、受ける側にとっては世の中にあって当たり前の行為。その行為の大切さに気づいたことだった。つまり、WR実行委員としての参加者への「思い」、茶道でのお客様への「思い」、そして会社における消費者への「思い」につながっていく。金澤さんは営業に配属されるらしいが、商品を売ることだけに専念するのではなく、自分を十分に発揮できる職場にしたいそうだ。そして、WR実行委副委員長の経験から、いつかは引っ張る側になれたらいいなと思う。

WR実行委員会が所属する学生課の職員さんとの出会いは、学生の視点だけでは見られない「大人の目、意見」に触れることができた。金澤さんは仕事の重さや人間関係などで、実行委員を何度も辞めようと思ったが、最後までやり通したことで、多くの感動と出会えた。いまでは入学時よりひと回りもふた回りも大きくなったと、自覚できるほどだ。

「4年間という時間はあっという間であり、この短い自由な時間をいかに使うかは自分次第」。良くいわれる言葉だが、今回のインタビューを通じて、それを実感した。

（学生記者　中村昌太郎　伊藤由紀）

外国旅行で性格のギアを切り換える

総合政策学部政策科学科
中居　友紀さん

「中大生活では、いろいろな人と出会えたし、挑戦もした。自分を変えるような体験ができたと思います」。中居さんの4年間のすべては、「挑戦」がキーワードになっている。

2年生の春、ちょうどサークルに

でも入ろうかと思っているとき、たまたま貼ってあった「旅の会」のポスターを見つけたので、軽い気持ちで入ったが、結果的にはここで得られたものは大きかった。

旅好きな先輩の話を聞いているうち、いつしか自分も旅のトリコになっていた。その夏すぐサイパンに行き、スキューバダイビングの免許を取得した。さらに3年生になってドイツに短期留学し、その足でヨーロッパ周遊旅行に出かけた。

そして友人との中国旅行、オーストラリア留学、旅の会で「東南アジア班」を自分でつくり、リーダーとして後輩を引率した。単に旅行するだけではない。勉強を目的とした留学にも力を入れた。「ドイツを目指したことには、ちゃんとした理由があったんです」。

ちょうど小学生だった10年前、なにげなくテレビを見ていたら、湾岸戦争のニュースをやっていた。その時、「原油にまみれた鳥」の映像が大写しになり、中居さんはかなりのショックを受けた。以来、環境問題に興味を持つようになり、やがて、それが総合政策学部の志望理由にもつながっていった。

中大に入ってから、「環境問題と経済は切り離せない」という問題意識から、金融政策の勉強に励む一方、環境保護で世界的にも先駆的な役割を果たしている、ドイツという国を見てみたいと思うようになり、ライプツィヒへ1カ月間短期留学し、空きビン回収や、市民の「無駄な包装はしない」という徹底した認識ぶりに、感銘を受けた。

帰国後、一番関心のある「環境問題と経済」に戻った。そして経済を中心とする金融についての知識をさらに身につけたいと思ったので、中居さんは金融政策のゼミに入った。

また、オーストラリア留学ではイタリア、フランス、スペイン、ブラジルからの留学生と学んだ。自分の意見をはっきり主張する彼らに大いに刺激を受けた。オーストラリアを留学先に選んだのは、旅先で出合った知人から手つかずの自然の雄大さを聞かされたのがきっかけとなった。

スカイダイビングでは、飛行機から飛び下りる前は恐怖で吐きそうだった。パラシュートが開くまでの15秒ほどの降下は本当に怖かったが、雲を抜けると素晴らしい景色がパッと広がる。そこをフワフワと空中散歩しながら自然を満喫する。「この時ばかりは、勇気を出して飛んでよかったです。自然を丸かじりした感じですね」。

中居さんの旅はいつも貧乏旅行だ。洋服もあまり持っていかず、みやげ物も買わない。「中国のトイレって、いうこともありました。〝入っている〟のかな？　あっ、入ってた〟なんて、しょっちゅうですよ。それでも案外、慣れてしまうんですよね」と平気で話す。

旅先では現地の人たちと積極的にコミュニケーションを図る。東南アジアでは、洋服などは何でも値切る。しまいには「もう、ちよっと！」と日本語で交渉だ。

ベトナムから日本に戻ってきて感じたんですが、地べたに座った高校生が無気力な表情で、タバコを吸っているんです。ちょっとおかしいんじゃないか、と思いました。その点、東南アジアは生活が苦しくても、毎日をすごく楽しんでいる。ポジティブな彼らから、たくさんのエネルギーをもらって帰ってくるんです。

反面、この国（日本）は大丈夫だろうかと思いました。

こんな積極的な中居さんにも、かつては極めて消極的だった。大学入試で中大と立大の両校を受かったが、どちらに進むか大いに迷った。総合政策学部は発表やディスカッションが多いので、自分には不向きではないかと思ったが、「逃げていたのでは何も進歩がない」と、結局は中大を選んで大正解だった。

就職活動中、日帰りの合宿セミーで「AERA」の人に「なんでそんなにコンプレックスが強いの？　会社が自信のない人を採用すると思う？」といわれ、ガツンときた。これをきっかけに、ギアを「チャレンジ」に切り換えた。おかげで金融機関から内定をもらうことができた。

大学入学を機に〝性格の転換〟を図った彼女に、「後輩へのアドバイス」を聞いてみた。「なんでもやってみようという気持ちを持つことですね。新しいものに出会う経験から新しい考え方やものの見方がどんどん出てきます」。

（学生記者　杉村麻衣子　山口文晴）